故事成語「臥薪嘗胆」確認テスト（十八史略）｜定期テスト対策｜誰でも古典塾
解答・解説

問1 夫差讎（あだ）を復（ふく）せんと志し／夫差讎を復せんと志す。「復讎」は「あだをかえす（仇討ちをする）」の意。「志」は「〜しようと志す・心に決める」。

問2 呉王夫差が、父の仇を忘れないために、毎日薪（たきぎ）の上に寝起きしたこと。寝心地の悪い薪の上に臥すことで、復讐の決意を新たにし続けた。

問3 イ。臥薪（薪の上に臥す）は呉王夫差の行動、嘗胆（胆を嘗める）は越王勾践の行動である。

問4 「使」は使役を表し、「（人）をして…しむ」と読む。ここでは「人をして呼ばしめて」と読み、「家来に（自分を）呼ばせて」の意。読み…人をして呼ばしむ。

問5 「夫差よ、お前は越の人間がお前の父を殺したことを忘れたのか（いや、忘れてはならない）。」反語的に自らを戒める言葉である。

問6 (1) 一つ目の「而」…「なんぢ（汝）」と読み、「お前（夫差自身）」を指す呼びかけの語。 (2) 二つ目の「而」…「なんぢ（汝）の」と読み、「お前の」の意で、「父」を修飾する。いずれも二人称の代名詞として用いられている。

問7 闔閭（こうりょ）。呉王闔閭は越との戦いで傷を負い、それがもとで死んだ。その子が夫差である。

問8 胆を坐臥（ざが）に懸（か）け。「於」は場所を示す置き字で、「坐臥に（座る所・寝る所に）」と読む。胆を日常の生活の場に吊るしておく、の意。

問9 「お前は会稽の恥を忘れたのか（いや、忘れてはならない）。」自らに問いかけ、復讐の志を奮い立たせる言葉である。

問10 越王勾践が会稽山で呉王夫差に敗れ、降伏して屈辱を受けた出来事。勾践が呉に屈服させられたことを指す。

問11 越に殺された父の仇を討つという復讐の決意を、忘れず奮い立たせるため。薪の痛みによって、つねに恨みを思い起こすことを目的とした。

問12 越王勾践が、会稽山での敗北の屈辱を忘れないために、苦い胆（きも・肝）を身近に懸けておき、起き伏しのたびにそれを嘗（な）めたこと。

問13 会稽山で夫差に敗れて降伏した恥を忘れず、復讐の決意を保ち続けるため。苦い胆の味によって、つねに屈辱を思い起こそうとした。

問14 ア（疑問・反語を表す助字）。ここでは「〜か、いや〜ない」という反語の意で、自らを強く戒めている。

問15 (1) 朝夕…朝も夕も。一日中。いつも。 (2) 坐臥…座る所と寝る所。ふだん起き伏しする生活の場。

問16 どちらも、受けた屈辱や仇を決して忘れず、つらい思いをわざと続けることで復讐・雪辱の決意を保ち続けようとする、執念深く忍耐強い態度。

問17 イ（目的を達成するために、長い間苦難に耐えて努力すること）。もとは復讐のための忍耐を指したが、広く「目標達成のため苦労に耐えること」の意で用いられる。

問18 （解答例）彼は不合格の悔しさをばねに、臥薪嘗胆の思いで一年間勉強を続け、ついに志望校に合格した。（「目的のために苦難に耐えて努力する」意味で使えていれば可）

問19 『十八史略』。（同じ故事は『史記』にも記される。）

問20 ウ（捲土重来）。一度敗れた者が、再び勢いを盛り返して巻き返すことを言い、雪辱を期して努力する点で「臥薪嘗胆」に通じる。なお「呉越同舟」は仲の悪い者が同席すること、「切歯扼腕」は激しく悔しがること、「蛍雪之功」は苦学して成功することで、いずれも意味が異なる。

問21 （解答例）どんなにつらい状況でも、目標を忘れずに耐え努力を続ければ、いつか雪辱を果たすことができるということ。（自分の言葉で「忍耐・努力・目的達成」の趣旨が述べられていれば可）